



南總
里見
八大
傳

昭和四年十月十日 印刷
昭和四年十月十三日 發行

有朋堂文庫
南總里見八大傳二卷
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼
發行者

三浦捷一

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

八大傳第五輯自序

余常以謂。有遊乎世者。有爲世所遊者。遊乎世者。適於自所適。不適於人所適。是以樂在內無竭也。爲世所遊者。適於人所適。不知自所適。是以徵其樂於外。以自苦焉。若狂接輿遊于歌詠。莊周遊于寓言。左思司馬相如遊于文場。杜甫李白遊于詩詞。羅貫笠翁遊于傳奇小說。雖所遊不同。而其樂一致。亦惡踏人之足跡哉。蓋鸞鳳不羣飛。葛藤不獨立。葛藤也者。吾欲拂之。鸞鳳也者。不可得而爲友。雖然。人世一夢中。其所遊。非華胥必南柯。寤寐在我。何遠之有。能知是樂。而後遊者。心之欲與不欲。無往不樂。邀乎邀乎。余固也久矣。今茲端月。本編脫藁。暨剞人告成。卽是言爲序。

南總里見八犬傳

文政五年陽月上澣

簑笠漁隱

二

南總里見八犬傳 目錄二

第五輯 卷之一

第四十一回……………一

木下闇妙眞訝依介
神宮渡信乃遭稽平

第四十二回……………二

撫夾剪犬田決進退
誣額藏奸黨逞殘毒

第五輯 卷之二

第四十三回……………四

射群小豪傑鬧法場
涉義士俠輔投河水

第四十四回……………六

雷電社頭四雋會語
白井郊外孤忠親讐

第五輯 卷之三

第四十五回……………八

賣弄名刀道節復怨
追喪窮寇助友換敵

第四十六回……………一〇三

地藏堂莊助爭首級
山脚村音音拒舊夫

第五輯 卷之四

第四十七回……………一〇〇

莊助三試道節
雙玉交還其主

第四十八回……………一四

馱馬暗導兩夫妻
兄弟悲全二老親

第五輯 卷之五

第四十九回……………二六

陰鬼陽人肇判然
節義貞操迭苦諫

第五十回……………一九〇

白頭意人遂合登
青年孀婦入菩提

第六輯 卷之一

第五十一回……………二二

兵燹燒山走五彥
鬼燐助馬導兩孀

第五十二回……………二六

高屋暖悌順搏野豬
朝谷村船虫贈古管

第六輯 卷之二

第五十三回……………二八

烟上謬捕犬田
馬加竊奪船虫

第五十四回……………二六

常武疑囚犬士
品七漫話說奸臣

第六輯 卷之三

第五十五回……………二八

馬大記賺言途窮籠山
栗飯原滅族里遺犬坂

第五十六回……………三〇

旦開野歌舞暗遺釵兒
小文吾諷諫高論舟水

第六輯 卷之四

第五十七回……………三三

對牛樓毛野鑾_レ響
墨田河文吾逐_レ船

第五十八回……………三九

窮阨初解轉遭_二故人_一
老實續_二主家報_二舊憂_一

第六輯 卷之五上册

第五十九回……………三五

京謙倉二犬士憶_二念四友_一
下毛州赤岩庚申山紀事

第六輯 卷之五下册

第六十回……………三八

胎內竇現八射_二妖怪_一
申山窟冤鬼託_二骸體_一

第六十一回……………四六

敲_二柴門_一雛衣訴_二冤枉_一
辯_二故事_一禮儀告_二薄命_一

第七輯 卷之一

第六十二回……………四五

船虫姦計說_二禮儀_一
現八遠謀赴_二赤崁_一

第六十三回……………五一

携_二短刀_一來緣連訪_二師家_一
與_二衆兇_一挑_二信道顯_二武藝_一

第七輯 卷之二

第六十四回……………四八

現八單身與_二衆惡_一戰
緣連牙二郎逐_二信道_一

第六十五回……………四八

逼媳一角求胎
劈腹雞衣仆讐

第七輯 卷之三

第六十六回……………五〇

斬妖邪禮儀雪父怨
丐毒婦緣連歸白井

第六十七回……………五四

禮儀義捨家祿
船虫謀脫縲縲

第七輯 卷之四

第六十八回……………五二

穴山枯野村長救秋實
猿石旅宿濱路誘濱路

第六十九回……………五六五

謨仕官木工作豪留信乃
薦給事奈四郎擊四六城

第七輯 卷之五

第七十回……………五八二

指月院姦夫伴淫婦
雜庫中眼代捕戌孝

第七十一回……………六〇七

檢冤死堯元知姦
寓禪院舊識再會

第七輯 卷之六

第七十二回……………六二八

三士一僧敬五君
信乃道節謁甲主

第七輯 卷之七

第七十三回……………六三

謬仇奈四郎喪頭顱
留客次團太誇鬪牛

南總里見八犬傳

東都 曲亭主人編次

第五輯 卷之一

第四十一回

木下闇に妙眞依介を訝る
神宮渡に信乃稽平に遭ふ

蜚崎十一郎照文は、文五兵衛共侶に、逃る惡黨を追走らして、舊の處に來て見るに、妙眞は小草の上に、伏沈みたる儘なるを、頻に呼ども應をせず。こはいかに、と驚睭て、兩人右より左より、やをら扶起しつゝ、遽しく石澗を掬て、顔に吹被などしたる、介抱等閑ならざれば、妙眞は稍こゝちづきて、眼をひらきて吻く息の、狹霧は雨と降更ら、涙を袖に堰かねて、膝より傳ふ行潦、ながらふる身をうらみ良なる、胸さへ曇る夕月の、幽き影に、と見かう見て、喃古那屋の翁、蜚崎ぬし、うちも累る殃厄の、一箇脱れて又一箇、いとも怪しき風雲の、降集程に見えずなりし、穉きものはいかにぞや。その亡骸は樹杪に、掛られたる歟、地に落し歟。よ

しや軀むくろを引裂ひきされて、七段八段になりたりとも、今一たび見まほしけれ。あらずやいかにと問とかけて、又また漣然さめくと泣沈なきしづめば、文五兵衛ぶんごべゑもはふり落おちる、涙なみだに鼻はなをつまらして、否いな舵かぢ九郎くわうらうこそ引裂ひきされし、亡骸なきがらは彼處かしこにあれ、大八だいはちの親兵衛しんべゑが往方ゆくへは知るよしなけれども、願おもふに渠かれは小兒せうになり、犯をせる罪つみのあるものならぬに、夜叉やしゃ歟や天狗てんぐの所行わぎなりとも、兇暴虎狼きようぼうこうらうの惡棍わるものと、ひとしく命いのちを絶せれんや。世よに神隱かみかくしといふことありて、速はやければ一兩月りやうげつ、遅おそくとも兩三年りやうさんねんには、還かへさるゝものぞとよ。歎なげくは渠かれが爲ためならず、神かみに祈いのり佛ほとけを念ねんじて、かへり來くる日ひを俟まち給へ。今とて術すべはあらずかし。といひつゝ目皮まぶたを押拭おしぬぐへば、妙眞めうしんいようち泣なきて、大八だいはちの親兵衛しんべゑは、おん身の爲ためにも孫まごなれども、男おとこはよろづに心こころつよくて、しかばかりだに諦あきらめ給はゞ、思おもひ絶たえてもありぬべし。況まいて小文吾こぶんごどのといふ、乞きとせし男兒そのこ一人あり。吾儕わなみは曩さきに子こと媳よめを、喪うしなふてまだ幾日いくかもあらず。僅わずかに遺のこす樞實かしのみの、ひとつといふて掛替かけがへもなき、孫まごさへ神かみに獲さられしを、歎なげかでいつまで待まちるべき。絶たえぬ思おもひに病驕やみさらばふて、世にも人にも疎うそれんより、この野のの露きえと消きえなまし。愁なまじひに呼活よびいけられて、強顔つれなきものは命いのち也。悲かなしきかな。と身を投俯なげふして、哽咽むせかへり亦また咳逆またせきあぐる、哀傷あいじやうさこそ、と文五兵衛ぶんごべゑは、人の歎なげきもわが涙なみだも、禁さぐめかねつゝつゝいるたり。照文聲てるぶみを勵はげして、怜悧さかしけれども婦人ふじんの臆斷おくだん、時ときの不祥ふしやうに値あばとて、生せいを輕かろんじ死しを樂はがふは、亦また甚またしき惑まよひならずや。吾われつらくと思惟おもひ

るに、大八の親兵衛は、鬼神の爲に隠されて、今その往方をしるよしなくとも、決して恙あるべからず。何となれば、渠は四歳の小兒なれども、原是犬士の一人なり。犬士の一人たるときは、伏姫うへのおん子に等し。伏姫うへのおん子ならば、役行者の擁護もあるべく、観音薩埵の利益もあらん。さればこそいぬる比、父房八に踢られしとき、一旦息絶たりけれども、大法師に扛抱れて、忽地甦生せしのみならず、その胎内より握固たる、左の拳をうち披きて、仁の字の玉顯れ出、なかりし瘡の身にいで来て、形牡丹に似たる事、是未曾有の奇特なれ。大約かくのごとき神童は、窮阨の中に在りといふとも、鬼魅もこれを犯すべからず、水火もこれを損ふべからず。凡庸痴呆の童子に等しく、野狐天狗に勾引れて、豈溝壑に死すべきや。神慮と佛力は凡智もて、量知るべき事ならねども、舵九郎を屠戮して、親兵衛を拯れしは、役行者の應驗ならん歟。爾らずは伏姫の神靈成、神謨にぞあらんずらん。彼姫うへは心雄々しく、且孝にして、信あり義あり。その心術と行狀は、丈夫にも多く得がたし。終らせ給ひし爲體と、御遺言の趣を、今さら思ひ合すれば、骸は富山に瘞れて、二十年あまりふる塚の、標の松を肥すとも、靈は必犬士のうへを、護らせ給ふ事あるべし。わが推量に違はずは、他し犬士と俱ならで、此度彼小兒をのみ、まづ一人將て還りて、君の見參に入れんとせしは、時のなほ

はやきによりて、神慮に協せ給はねば、且く隠し給へるならん。さばれ只是推量のみ、當らずといふとも據あり。今ゆくりなく失ひし、親兵衛に恙あらば、玉を握りて生るべからず、身に亦丹花の痣もいで來じ。孫の爲に自愛して、還さるゝ日を俟給へ。祖母外祖の愁歎は、恩愛の切なるも、私の情義にして、只その一家のうへに係れり。彼稚兒を失ひし、わが愁歎の八しほにましたる、君の爲には不忠に似たり。友には不信と怨みられん。今此時の不祥に惑ふて、事の不如意に怒狂はど、われこそ腹を切るべきに、死なぬは命を惜むにあらず、死してその益なければ也。心を定めてわがいふよしに、就て惑ひを解ねかし。世を憤るは愚癡にこそ。後の榮を俟ずや。と頻に諫奨せば、文五兵衛は言下に悟りて、亦共侶にぞ慰めたる。妙真僅に涙を歛めて、蜚崎ぬしの白地に、料らせ給ふ如くならば、後憑しく侍れども、過世いかなる業報にや、子さへ孫さへ失ひし、わが身ひとつの薄命は、樹枝に離れし猿猴にも、及ばぬものをいかにひとつ親兵衛に、ふよしあらん。よに惜からぬ命なれども、得死れぬは罪障の、いとしも深き故にひとつ親兵衛に、身の暇を給はせ、剪たる髪を剃捨て、斗藪行脚の比丘尼とならば、萬にひとつ親兵衛に、環あふ日のありもやせん。譬ば素懷を得遂ずして、旅より旅に野ざらしの、屍は獸を肥すしも、罪障竟に消滅せば、後の世こそやすかるべけれ。安房へ參るは要なし。と

いひかけて目を拭へば、文五兵衛も堪かねて、頻に涕をうちかみけり。照文聞て頭をうち掉り、剃髪ていはつの事はとまれかくまれ、ひとり不覺そやろに行脚あんぎやして、孫の往方ゆくへを索たづねん事は、遂さけがたうして且危かつあやふし。さればとてこの儘ままに、市川いちかはなる宿所しゆくしょに還かへらば、舵九郎かぢくろうが夥計なからの惡棍わるもの、撃漏うちらせしも多おほかるに、又横またはこざまに恨うらみを含ふくみ、冠あだせんとこそ謀はかるらめ。かよれば宿所しゆくしょに還かへるも危あやふし。一旦たんあは安房あはへ赴おもむきて、しかして後に進退しんたいを、國司こくしの仰おほせに従したがはゞ、身はやすくして危あやふからず。又大八まただいはちの親兵衛しんべゑは、神明佛陀しんめいぶつだの擁護おうごによりて、雲くもに駕のり空くうを翔かけらば、今はや安房あはに赴おもむきたる歟か、これも亦また知るべからず。縦たゞひその事あらずとも、辛からくして將みて來きつる、犬士けんしを途みちに失うしなふて、その祖母おばはだも俱ぐして邁まずは、何なにを證あかしに云々と、わが君きみに聞えあぐべき。こは只ただおん身がうへのみならず、その進退しんたいは某それがしが身にしも係かる事なりかし。かくまでに言ことをわきて、薦引すゐひきても聽きれずは、わが命運めいうんも是これまでなり。さは一犬士けんしを失うしなひし、愆あやまちをいかにせん。進すすては里見殿さきみどのに、まうし解さかん證あかしもなく、退しりぞては、大等ちゆうだいに、ふたよび面おもてを向むがたし。進退しんたいこよに谷さまりて、自殺じきつするより外ほかにすべなし。事情じやうけを思おもひ汲くで、人をも身をも謬あやまたば、行脚あんぎやの功德くどくもその甲斐かひあらんや。みづから深念しあんを決きめてよ。と理切ことわりせめて諷きざせども、妙眞めうしんはなほ思おもひかねて、文五兵衛ぶんべゑに相譚かたへば、聞きも訖をはらず眼まなこを睜みはりて、蜚崎ぬしの宣のたまふ趣おもひき、理ことわりならずといふことなし。現市川けにいちかはへ還かへるは危あやふく、安房あはへ赴おもむけば惡棍わるもの等

が、餘毒を避るに究めてよし。今さら澁ることやはある。われはこより立わかれて、竊に武藏へ赴くべし。かくて道德と犬士等に、事の趣を報知して、又立かへりて市川なる、留守の宿をも折々訪ふべく、時宜によらば安房へいゆきて、おん身に對面すべきなり。其時おん身はかへり來るとも、亦只彼地に留るとも、そは左も右も隨意なるべし。長僉議せば小夜のみ更ん。今宵の宿りへ急ぎ給へ。と言葉せわしく勸れば、妙眞やうやく頷きけり。照文ふかく歡びて、しからば月の没ぬ間に、とくくと誘引立て、舊の大路へ赴くに、妙眞はその道すがら、文五兵衛を見かへりて、さるにても痛ましきは、依介が事也かし。渠が心ざまの淳樸なる、他し簞工等に立優りて、主の爲になるべきもの也。人にしらせぬ旅なれども、渠なればこそ途までもとて、愁に將て來たるにより、可惜命を隕さしたれ。不便なる事してけり。といひつゝ涙吒めば、文五兵衛も嘆息して、われも爾こそ思ふなれ。心急ぎのせらるゝとも、亡骸を埋めずは、狗烏に傷られん。としてやよけん、かくやせまし。と相譚てゆく程に、聊先に進みたる、照文これをうち聞て、現彼依介とかいふ小厮は、大敵を見て怯せず去らず、遺たる杖をとり揚て、且く防戦ひつゝ、其處に命を隕せしは、よに有がたき義僕也。その亡骸は今竊に、道次に埋置て、後に改葬るべし。まづ彼處までいそがずや。といふに兩人歩を早めて、舊の松原に

來にければ、前面なる樹下に、一個の人立在たり。つくぐと透し見るに、額の素きは、亡者の被る、地藏楮にやあらんずらん。背の-highは一袂の包物を負るなり。手に竹杖を突立たる、その模様大かたならず、依介に似たりけり。妙真遙にこれを見て、遽しく文五兵衛が袂を引つ、聲を細めて、彼見給へ。依介が、冤魂の顯れたり。彌陀佛々々々。と唱れば、文五兵衛は領くのみ、共に念佛する程に、照文はいちはやく、ほとりに進み近づきて、そは依介にあらずや。と問へば然なりと應つと、杖に携て樹陰を出たり。當下妙真と文五兵衛は、前に立、後に遶りて、眼を定めて再び見るに、地藏楮歟と思ひしは、白曝の手巾もて、額の瘡を巻たるなり。原來いまだ死ざりし、と思へば齊一聲を被て、やよ依介歟、恙なきこそ幸なれ。そなたは嚮に悪棍等に、いたく撃れて倒れしかば、絆絶たらんと思ふになん、今も今とてその事を、いひつ歎きつ、亡骸を、とり斂んとて來る途にて、ゆき遭たりし歡しさよ。といへば依介微笑て、僕は彼ときに、一旦は死せじならん、われをも知らで倒れし程に、日は暮れ、天は結陰て、暴き風雲の過るまにく、わが面を撲つ驟雨の、口にさへ入りにけん、忽地に甦生しつ、四下を見れば薄月夜、唧がましき虫の音のみ、敵も躬方もあることなし。われはともあれ人々は、いかになり給ひけん、と思へば心安からず、辛して身を起せば、漸々に撲傷の疼痛を覺て、速には走